

日本文学名著
日汉对照系列丛书

万延元年的

万延元年
のフットボール

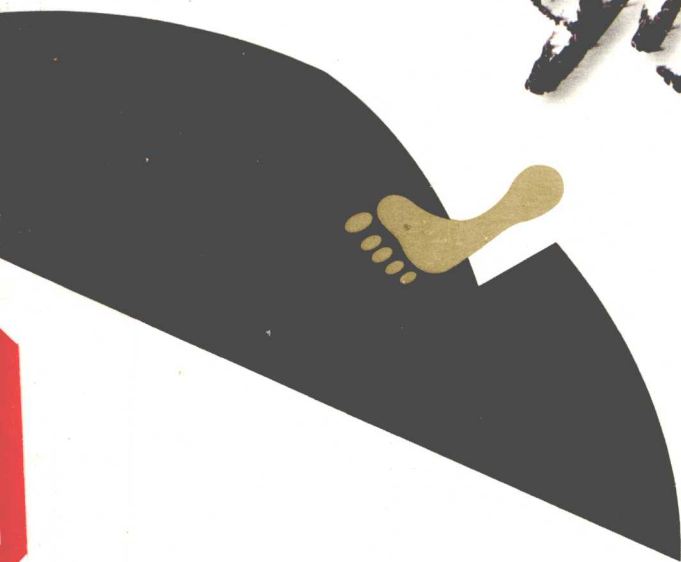
■诺贝尔文学奖的代表作，一百年前农民暴动的办法，依靠足球队的。现代暴动……现实与虚构、现在与过去、城市与山村、东方文化与西方文化交织，正义与畸形儿、暴动、通奸、乱伦、自杀纠缠，集知识、热情、野心、态度于一炉……

足球

大江健三郎 著
赵双钰 译



吉林大学出版社



日本文学名著
日汉对照系列丛书

万延元年的

万延元年
のフットボール

足球

■诺贝尔文学奖的代表作，一百年前农民暴动的办法，依靠足球队，现代暴动，现实与虚构，现在与过去，城市与山村，东方文化与西方文化交织，正义与畸形儿，暴动，通奸，乱伦，自杀殉难，知识，热情，野心，态度于一炉……

大江健三郎 著
赵双钰 译

吉林大学出版社



MAN'EN GANNEN NO FOOTBALL

by OE Kenzaburo

Copyright © 1967 OE Kenzaburo

All rights reserved.

Originally published in Japan.

Chinese (in simplified character only) translation rights arranged with
OE Kenzaburo, Japan

through THE SAKAI AGENCY and BARDON-CHINESE MEDIA AGENCY.

Simplified Chinese Edition Copyright © 2008 Jilin University Press

著作权合同登记图字: 07-2009-2151号

图书在版编目(CIP)数据

万延元年的足球/(日)大江健三郎著;赵双钰译. —长春: 吉林大学出版社, 2009. 8

(日本文学名著日汉对照系列丛书)

ISBN 978-7-5601-4056-8

I. 万… II. ①大…②赵… III. ①日语-汉语-对照读物②长篇小说-日本-现代 IV. H369. 4: I

中国版本图书馆CIP数据核字(2009)第133274号

日本文学名著日汉对照系列丛书

万延元年的足球

(万延元年のフットボール)

-
- | | |
|---------|--|
| ◎作者 | 大江健三郎 |
| ◎译 | 赵双钰 |
| ◎责任编辑 | 刘冠宏 |
| ◎责任校对 | 刘冠宏 李 双 |
| ◎封面设计 | 张沐沉 |
| ◎版式设计 | 孙明晓 |
| ◎出版发行 | 吉林大学出版社 |
| ◎社址 | 长春市明德路421号 |
| ◎邮编 | 130021 |
| ◎发行部电话 | 0431-88499826 |
| ◎网址 | http://www.jlup.com.cn |
| ◎E-mail | jlup@mail.jlu.edu.cn |
| ◎印刷 | 北京市通州富达印刷厂 |

版权所有 翻印必究

150mm×230mm 16开 26印张 515千字

2009年08月第1版 2009年08月第1次印刷

ISBN 978-7-5601-4056-8

定价: 38.00 元

出版者的话

语言是为交流而生的。原始的人们，必是由于郁郁乎有感于心，岌岌乎有危及身，手舞之足蹈之而不达其意，便佐之以喉舌了。至于那有感于心的是爱是恨，有危及身的是兽是敌，我辈几万年后恐怕难以妄加猜测。总之，咿呀呼喝，渐成定式。以警以劝，极得其便；以歌以咏，曲尽其情。这便是今人所说的语言了。

而就古人的交流范围而言，不过是一个部族。因此，语言自诞生之初便是因部族而异的。至今，中国的少数民族地区仍然存在着隔山不同语过河非乡音的情形。此后，私财积，政权生，征伐起，海内一。于是，王权下的语言在不同部族间渐渐统一融合，语言的差异便主要体现在国家之间了。由于语言的不解，异邦之间感觉神秘，出现误会，甚至由无知而仇视。

解除外国人在本土人眼里的神秘、误解，当然需要交流。学语言，是交流所需。而学语言的过程本身，也是交流。最简单的问候语，往往是一国风土人情的缩影；名家的小说文章，则是欣赏美文和解读社会的阶梯。

日本与中国不过一苇可航之遥，文化交流源远流长。吉林大学是中国名校，日语教育素建伟勋。此次由吉林大学出版社组织出版的日本名著日汉对照系列丛书，既立意于促进日语学习，又便于大众欣赏日本名家美文，其意义深远。

本丛书选译了田山花袋的《棉被》，泉镜花的《高野圣僧》《歌行灯》，樋口一叶的《浊流》《十三夜》《青梅竹马》，岛崎藤村的《破戒》，森鸥外的《舞女》《山椒大夫》《高濂舟》，夏目漱石的《我是猫》《少爷》，芥川龙之介的《罗生门》《鼻子》《山药粥》《蜘蛛丝》《地狱变》《河童》，梶井基次郎的《柠檬》《有城楼的市镇》《冬天》《冬

天的苍蝇》《崖上的情绪》，横光利一的《蝇》《太阳》《头与腹》，堀辰雄的《起风》，川端康成的《伊豆舞女》《雪国》，大江健三郎的《万延元年的足球》等，都是日本自明治到现代有代表性的作家作品。

这些作家作品在创作思想上移风易俗，在表现技法上不乏创新。因而，有的语言表述悖于常规，有的用词艰涩语意叠积，有的意境微妙难以言传，给对译工作增加了不少难度。译者虽尽心努力，但水平所限，译文难免有不妥之处，还望读者指正。

吉林大学出版社

2009年8月

序言

大江健三郎（1935- ），日本当代著名作家，1994年诺贝尔文学奖得主。主要作品有《饲养》（『飼育』，1958年）、《个人体验》（『個人的な体験』，英译Personal Matter，1964年，诺贝尔文学奖获奖作品）、《万延元年的足球》（『万延元年のフットボール』，英译Far Cry，1967年，诺贝尔文学奖获奖作品）、《洪水淹没我的灵魂》（『洪水はわが魂に及び』，1972年）、《新人，睁大眼睛！》（『新しい人よ眼ざめよ』，1983年）等。

《万延元年的足球》是大江健三郎的一部长篇小说。小说运用极其丰富的想象力，讲述主人公鹰四反对日美安全条约受挫后远渡美国，后又回到自己的家乡，在覆盖着茂密森林的山谷里，效仿一百年前曾祖父领导农民暴动的办法，组织了一支足球队，鼓动“现代的暴动”的故事。小说巧妙地将现实与虚构，现在与过去，城市与山村，东方文化与西方文化交织在一起，与畸形儿、暴动、通奸、乱伦和自杀交织在一起，描画出一幅幅离奇多采的画面，以探索人类如何走出那片象征恐怖和不安的“森林”。诺贝尔文学奖评委会认为，它“集知识、热情、野心、态度于一炉，深刻地发掘了乱世之中人与人的关系”。

大江的作品艰涩，语句冗长，特别是复句结构多，修饰复杂而用词异于常理，在日本有“翻译调”之称。因此，中文对译颇有困难。译者立足于作品反映的时代背景，力求翻译准确，在兼顾中文语言习惯之上，尽量保持其角度独特的修饰和叙述方式。特别是在人物描写上，译文注重从其角色出发，力

求其语言符合身份并能够反映角色自身的性格。

译者虽尽心努力，但由于时间与水平所限，译文难免有不妥之处，还望读者指正。

编者

2009年6月于长春

目录 | 万延の足球



1. 死者にみちびかれて	2
2. 一族再会	36
3. 森の力	66
4. 見たり見えたりする 一切有は夢の夢にすぎませぬか	96
5. スーパー・アーケツト	124
6. 百年後のフットボール	156
7. 念仏踊りの復興	184
8. 本当のここを云おうか	212
9. 追放された者の自由	240
10. 想像力の暴動	274
11. 蠅の力	302
12. 絶望のうちにあって死ぬ	334
13. 再審	368
附記	410

1. 死者にみちびかれて

夜明けまえの暗闇^{くらやみ}に眼ざめながら、熱い「期待」の感覚をもとめて、辛い夢の気分の残っている意識^{いしき}を手さぐりする。内臓を燃えあがらせて嚥下^{えんか}されるウイスキーの存在感のように、熱い「期待」の感覚が確実に軀の内奥に回復してきているのを、おちつかぬ気持で望んでいる手さぐりは、いつまでもむなしいままだ。力をうしなった指を閉じる。そして、軀のあらゆる場所で、肉と骨のそれぞれの重みが区別して自覚され、しかもその自覚が鈍い痛みにかわってゆくのを、明るみにむかっていやいやながらあとずさりに進んでゆく意識が認める。そのような、軀の各部分において鈍く痛み、連続性の感じられない重い肉体を、僕自身があきらめの感情において再び引きうける。それがいったいどのようなものの、どのようなときの姿勢であるか思いだすことを、あきらかに自分の望まない、そういう姿勢で、手足をねじまげて僕は眠っていたのである。

眼ざめるたびに、うしなわれた熱い「期待」の感覚をさがしもとめる。欠落感^{けつらくかん}ではなく、それ自体が積極的な実体たる熱い「期待」の感覚。見つけることができないと納得すると、あらためて再度の眠りへの斜面に自分を誘導しようとする、眠れ、眠れ、世界は存在しない。しかし今朝は、いかにも強い毒が軀になか全体を痛くして眠りへの遡行^{そこう}を妨たげる。恐怖心が噴出ししようとする。陽がのぼるまで一時間はあるだろう。それまでは今日がどのような日であるかを把握できない。胎児のように、なにもわからないで暗闇のうちに横たわっている。かつてはそのような時、性的な悪習が便利だった。しかし二十七歳、既婚、養護施設にいた子供^{こども}までの現在では、手淫をする自分を考えると恥かしさが湧きおこってたちまち欲望の胚子^{はいし}をひねりつぶす。眠れ、眠れ、それができなければ眠った人間を模倣^{もほう}せよ。不意に暗闇のうちに、昨日人夫たちが浄化槽をつくるために掘った直方体の穴ぼこが見えてくる。痛む軀になかでは荒廃した苦い毒^{くうはい}が増殖^{ぞうしよく}して、耳と眼、鼻、口、肛門^{こうもん}、尿道^{にょうどう}から、チューブ入りゼリーのようにゆるゆるはみだそうとしている。

眠った人間を模倣^{じゅうたい}したまま、僕は立ちあがり、渋滞しながら暗闇のなかを歩く。眼をつむり、軀のさまざまな部分を、ドア、壁、家具にうちつけては苦しい譫言^{うわごと}じみた呻き声^{うめ}を発する。もっとも、僕の右眼は、真昼に強く見ひらかれても視力をもたない。右眼がそのような事柄の奥底にひそむものを僕はいつ理解できるだろう？ それは厭らしく無意味な事故である。ある朝、僕が街を歩いていると、怯え^{おび}と怒りのパニックにおちいった小学生の団^{いっしゅうぶて}が石礫^{いしつぶて}を投げてきた。僕は片眼を撃たれて舗道に倒れたまま、この事故についてなにひとつ理解することがなかった。僕の右眼は、白眼の部分から黒眼の部分にまたがって横に裂け、視力をうしなった。現在にいたるまで、あの事故の本当の意味を理解したと感^{てのひら}じたことはない。しかもそれを理解することを惧れる気持がある。もしあなたが右眼を掌でおおって歩くなら、あなたは右前方に待ち伏せするじつに多くのものに会わなければならないだろう。あなたは突然に

1、亡者的导引

在黎明前的黑暗中，我睁开眼睛，渴求灼热的“期待”感觉，探寻着意识中依然残存的噩梦感觉，那种真实的、如同喝下威士忌后燃烧了五脏六腑的感觉。我以一种不安的心情盼望着这灼热的“期待”感觉在身体深处复苏，然而我的探寻终是徒劳。合拢无力的手指，然后，在迎着光亮而不情愿地消退着的意识中，一一辨别、感受着周身上下每一块肉与骨不同的沉重，并发现这感觉正一点点地变成钝钝的痛楚。于是，我不再挣扎，又一次接受了这浑身钝痛、支离破碎的沉重肉体。我睡着，以那种自己极不愿意想起究竟是什么东西、什么时候的姿势，手脚蜷曲地睡着。

每次醒来，我都要探求那失去的、灼热的“期待”感觉。它不是失落感，是那种本意积极、实在的、热热的“期待”的感觉。当我悟到已无法找到那种感觉，便放弃寻找，而希望把自己引向通往下再次入睡的坡道。睡吧、睡吧，世界本不存在。但是今天早晨，却有一种异常的巨毒使身体各处疼痛，妨碍了重返睡眠。我感到无法抑制的恐怖。离太阳升起大概还有一个小时。在此之前，还无法知晓今天会是个什么样的日子。我像胎儿一样，一无所知地横陈在黑暗中。以往这样的時候，性的恶习便深得其便。但现在的我已二十七岁、有家室、甚至还有放在保育院的孩子，一想到自己还要手淫，便生出耻辱之心，马上碾碎这欲望的胚芽。睡吧、睡吧，如果不行就装做熟睡的人！不知不觉中，昨天工人们为安装污水净化槽而挖掘的长方体坑在黑暗中渐渐显形。疼痛的身体中荒芜了的凄苦毒素开始繁殖，如同软筒内装着的胶状物一般，要从耳朵、眼睛、鼻子、嘴、肛门、尿道中慢慢溢出。

依然模仿着熟睡的人，我站起身，艰难地在黑暗中走过。我闭着眼，身体各处撞到门、墙、家具上，发出杂着痛苦呓语的呻吟。本来，我的右眼，即使是在大白天使劲睁开眼，也什么都看不见。而右眼变得如此的事情背后隐含的东西，我何时才能理解呢？那是一次讨厌的无聊事故。一天早晨，我在街上走着，一群陷入胆怯和愤怒的慌乱中的小学生把石块儿投了过来。我的一只眼睛被击中，摔倒在地上。对于这次事故，我一直无法理解。我的右眼从眼白横着裂到眼仁，失去了视力。直到现在，我从未觉得自己明白了这次事故的真正含义，而且心中还惧怕明白它。如果你用手捂住右眼走路，你恐怕也一定会遇到埋伏在右前方



衝突する。あなたはくりかえし頭を、顔を強打する。そのようにして、僕の頭と顔の右半分は、生ま傷のたえまがなく、僕は醜い。しかも僕は眼の負傷以前から、それは母親が、美しくなるであろう弟に比較しながら、僕の成人後の容貌について予言した言葉をたびたび思い出させたのであるが、しだいに自分にそなわっている醜さの特性をあきらかにしていた。失われた眼が、醜さを日々更新し、つねになまなましく強調しつづけているにすぎない。生来の醜さは日蔭にひそんで沈黙していようとする。それを日なたへひきずりだしつづけるのが、失われた眼の効果である。もっとも僕は暗黒にむかう眼に、ひとつの役割をあたえた。機能を喪失した眼をぼくは、頭蓋の内側の暗闇にむかって開かれている眼になぞらえた。僕の片眼は血のいつぱいたまった、体温よりいくらか熱い暗闇をつねに見つめている。僕は、自分の内部の夜の森を見張る斥候をひとり備ったのであり、そのようにして僕は、僕自身の内側を観察する訓練を、みずからに課したのである。

ダイニング・キッチンをとおりぬけ、手さぐりしてドアをひらき、そこではじめて眼をあけると、黒ぐろとした晩秋の夜明けまえの大気のはるかな高みのみがわずかに白んでいる。まっくろの犬が馳けより、跳びついてこようとする。しかし犬はただちに僕の拒絶を理解して声をたてず、じっと軀をすくめて、その小さな鼻面をキノコのように暗闇からつきだして僕に向っている。僕は犬を脇にだきあげて、ゆっくり前へ進む。犬は臭い。抱かれたままじっとして荒い呼吸をしている。脇のしが熱くなる。犬は熱病にかかっているのかもしれない。はだしの爪先が木枠にぶつかると、いったん犬を降ろし、手さぐりして梯子の位置を確かめ、それから犬を降ろした場所の暗闇をだきかかえると、もとどおりそこにすっぽりと犬がつまっている。微笑せずにはいられないが、持続する微笑ではない。犬はきつと病気なのだ。難渋して梯子を降りる。穴ぼこの底には、ところどころはだしの踝をうずめるほどにわずかな水がたまっている。肉を搾った液のようにわずかな水。地面にじかに腰をおろしながら、水がパジャマのズボンと下穿をとおして尻を汚すのを感じ、しかも自分がそれを拒むことのできない者のように従順に受けいれていることに気がつく。しかし当然犬は、水に汚れることを拒みうる。犬はものをいう犬がしかも黙っているように黙ったまま、僕の膝の上で平衡をとり、震えている熱い軀を僕の胸にわずかによせかけている。犬はその平衡をたもつために、鉤になっている爪を、膝の筋肉につきたててくる。自分がその苦痛をもまた拒むことができない者であるように僕は感じており、五分後、それに無頓着になる。尻を汚して睾丸と腿のあいだにしみとおってくる水にも、無頓着になる。172センチ、70キログラムの僕の肉体は、現にいまそれが位置している場所から昨日、人夫たちによって掘り出され遠方の川に棄てられた土の全量とかかわらぬものに感じられる。僕の肉体は土に同化している。犬の熱さと、二匹の腔腸類の内側のような鼻孔だけが、僕の肉体と、まわりの土、湿った空気の総体のうちで生きているものだ。鼻孔はおそろしい勢いで過敏になり、穴ぼこの底の貧しい匂いを、あたかも豊饒きわまりないそれのようにどっさりあつめてくる。鼻孔の機能がまさにフルに働いているので、収集されてくる数しれない匂いのいちいちを弁別することができないば

的诸多事物，你会突然撞上它们，你的头和脸会不断受到打击。就这样，我的头和右半部的脸便新伤不断。我很丑。而且，丑得让我常常想起眼睛受伤以前妈妈在比较我和可能变得英俊的弟弟的时候对我成人后容貌的预言。渐渐地，我所拥有的丑陋已经显在。失去的右眼，不过是日日更新着、不断鲜活地强调着这丑陋而已。先天的丑陋只想潜藏在阴影里保持沉默，但把它不断拖到光天化日之下的是这只瞎眼的功劳。但是，我给了这只面对黑暗的眼睛一个任务。我的这只眼睛时时注视着盛满血液、比体温更热的黑暗。我雇了一个守望我内心的夜的森林的哨兵。就这样，我对自己实行着观察自己内心的训练。

穿过厨房，我摸索着打开门，在那里才睁开眼睛。晚秋黑沉沉的黎明前夜，只有远远的高空泛出一缕微白。一条黑狗跑了过来，想要跳上来。但狗立即明白了我的拒绝，默不作声、安静地蜷缩起身体，把那像蘑菇似的小鼻尖从黑暗中伸出，面对着我。我把狗抱到腋下，慢慢前行。狗有些臭，就那样一动不动地被我抱着，喘着粗气。我的肋下越来越热，这狗也许是得了热病。光着的脚尖碰到了木框。我先放下了狗，摸索着确认了梯子的位置，往放狗的暗处抱了一下，狗还原封不动地在原处蜷缩着。我禁不住微微一笑，但这微笑难以持续。这狗一定是病了。我艰难地爬下梯子。坑底到处是刚及脚踝的积水，并不很多，就像绞肉时流出的汁液一样。坐到坑底，感觉着水在浸透睡裤和内裤弄脏了臀部，并发觉自己就像一个无法对它抗拒的人顺从地接受着。但是，狗是理所当然地会抗拒被水弄脏的。它沉默着，就像一条会咬人的狗从来不叫那样，在我的膝盖上保持着平衡，将颤抖发热的身体微靠在我的胸前。为了这种保持平衡，它把钩状的爪子扎进了我膝盖的肉里，我感到自己在抗拒这个痛苦上也是无能之辈，五分钟之后，对此便不再介意了。对于弄脏了屁股并渗透睾丸与大腿之间的污水，也变得无所谓了。我能感觉到，1米72高、70公斤重的肉体，与被昨天工人们从这里挖出并被扔到远方河中的泥土在总量上没有什么分别。我的肉体正在化为泥土。只有狗的体温和如同两只腔肠类动物内壁一样的鼻孔，是在我的肉体、周围的土壤、湿润的氧气的整体中活着的东西。鼻孔以惊人的势头敏感起来，如同嗅着什么极其丰饶的东西，贪婪地收集着坑底贫乏的气味。由于鼻孔的机能已发挥到极致，使得它不仅不能一一辨别收集到的无数种气味，而且在我几乎气绝、后脑（我感觉是直接将后脑部的头盖骨）撞到坑壁上之后，它也依然是只管吸入少量氧气和数千种类的气味。那荒芜了的凄苦的毒素仍然充塞着我的全



かりか、僕はほとんど気をうしなつて後頭部を、（それは直接に後頭部の頭蓋骨^{ずがいこつ}を、と感じられる）穴ぼこの壁面にうちつけたあと、ずっとそのまま千種類の匂いと少量の酸素とをとりいれつづけるのみである。荒唐した苦い毒は、なお舐じゅうにつまっているが、もう外部ににじみでくる様子ではない。熱い「期待」の感覚はかえってこないが、恐怖心は解除された。僕は、あらゆるものについて無頓着^{むとんちやく}になっており、現にいま、自分が肉体を所有していること自体について無頓着だ。ただ、完全に無頓着な自分自身を、いかなるものの眼も見えていないのが残念に思われる。犬？ 犬は眼をもっていない。無頓着な僕自身もまた眼をもっていない。梯子を降りきった時から僕は再びずっと眼をつむったままだ。

それから僕は自分が火葬に立ちあつた友人を、観照した。この夏の終りに僕の友人は朱色の塗料で頭と顔をぬりつぶし、素裸で肛門に胡瓜^{かいか}をさしこみ、縊死^{いし}したのである。深夜までつづいたパーティから、病気の鬼のような衰弱^{すいじやく}ぶりで戻ってきたかれの妻が、夫の不思議な縊死体を発見した。なぜ、友人は妻と共にパーティに行かなかったか？ かれは妻をひとりだけパーティに行かせて書斎に残り、翻訳（それは僕と協同の翻訳の仕事である）をしているといった状態を、誰もあやしまないような型の人間であつた。

友人の妻は、縊死体の二メートル前から、パーティのおこなわれた場所まで、恐慌^{きようこう}に髪を逆だて、両手をふりかざし、声のない叫びを叫び、子供っぽい緑の靴をひらひらおどらせて、誰の眼にも見えない真夜中の影を踏みながら、フィルムを逆回転させるようにまっすぐ駆けもどり、警察に通報すると、実家から迎えがくるまで静かにすすり泣いていた。そこで係官の調査の終つたあと、朱色の頭をして素裸の、腿には生涯の最後の精液をこびりつかせた、まさに救助しがたい死者の世話のすべては、僕と、友人の剛毅な祖母とがしたのである。死者の母親は、痴呆^{ちほう}状態に退行して役に立たなかつた。ただ、死者の扮装を洗いおとそうとすると、不意に確実な意志を主張してそれに反対したのみである。僕と老女たちは、吊問客^{ちようもんく}をすべて拒み、三人だけで、間断なく隠微、迅速に、かれ固有の特性をもった龐大な数の細胞を破壊されつつある死者の通夜をした。どろどろにとけてなにかえたいのしれぬものにかわつた甘酸っぱい薔薇色の細胞を、涸渴した皮膚がダムのようにせきとめている。朱色の頭をした友人の肉体は、かれが憐れにも勤勉に狭い暗渠をくぐりぬけるように生きて、しかも向うがわに抜け出すまえに、突然おしまいにしてしまった二十七年の生涯のいかなる時においてよりも緊迫した、危険な実在感をたたえて、軍隊風の簡易ベットに横たわり、傲岸^{ごうがん}に腐敗しつづけた。皮膚のダムは決潰^{けつさい}をせまられている。発酵した細胞群が肉体そのものの真に具体的な死を、酒のように醸^{かも}している。生き残つた者らはそれを飲まねばならない。友人の肉体が百合のように匂う腐蝕菌とあい関つて刻む濃密な時間は、僕を魅惑する。僕は、友人の死体が、その存在の全期間にわたつて、ただいちどきりの飛行をおこなう酔乎たる時間圏を見まもるうちに、くりかえし可能で幼児の頭頂のようにやわらかく暖かい、もうひとつ別の時間の脆^{もろ}さを納得させられた。

身，但不再有向外溢出的迹象。灼热的“期待”感觉反而没有回来，但恐惧的心情已被消除。我对一切都已变成无所谓了。眼下，对于自己拥有肉体这件事本身也是无所谓。唯一觉得遗憾的是，没有任何什么东西的眼睛在看着这个全不在乎的我。狗吗？狗没有眼睛。完全无所谓的我本身，也没有眼睛。从下了梯子时起，我又再次一直闭着眼睛。

然后，我观照我的友人，我参加了他的火葬仪式。在这个夏天快结束的时候，我的友人用红色涂料涂满了整个头脸，全身赤裸，肛门里插着黄瓜，上吊死了。他的妻子从一个持续到深夜的晚会回来，疲惫得像一只生病的兔子，发现了她丈夫吊着的诡异尸体。为什么友人没同妻子一起去参加聚会呢？他是那种谁也不会惊奇于他让妻子一个人去参加聚会而自己则留在书房里翻译（那是他和我合译的工作）的人。

友人的妻子被吓得毛发倒竖，双臂乱舞，发出无声的叫喊，叭嗒叭嗒地飞舞着孩子气的绿鞋，踏着深夜无人可见的身影，就像回放的胶片，从吊着的尸体前两米处一直狂奔回举办宴会的场所。向警察报案后，便静静地啜泣，直到娘家来人接她。所以，负责的警官调查结束后，有着红色脑袋、一丝不挂、腿上沾着毕生最后的精液、不可救药的友人的一切后事，都是我和友人那刚毅的祖母完成的。死者的母亲已经退入痴呆状态，帮不上任何忙，只是在要洗掉死者的装扮时，出人意料地表现出明确的意志来反对。我和老妇人们谢绝了所有吊唁的客人，只由三个人为死者守了灵。带着他特有个性的无数细胞，正在被不间断地、迅速而隐蔽地破坏着。干涸的皮肤像水坝一样堵住了酸甜的蔷薇色细胞，这细胞已融化成泥沼状，变成了不知本来面目的东西。友人带着红色脑袋的肉体，比他可怜的二十七年生涯中的任何时候都更充满了紧张而又危险的实在感，横陈在简易的行军床上，傲岸地腐烂着。这二十七年，他的生活就像在勤奋地穿越一条狭窄的暗渠，而就在即将钻出来到达对岸之前却突然死去。皮肤的大坝正在受到决堤的冲击。发酵的细胞群正在如酿酒般地酿造着肉体自身真实而具体的死亡。活下来的人必须要把它喝下去。友人的肉体 and 拥有百合味气息的腐蚀细菌纠集着刻下浓密的时间，诱惑着我。在我守望着友人的尸体用它所存在的全部时间做了唯一一次飞行。而在我守望这纯粹的时间圈的过程中，不得不承认了另一个可重复的、如幼儿头顶般柔软温暖的时间的脆弱。

我无法不嫉妒。在我不久终将闭上双眼的肉体体验腐烂之



僕は嫉妬せざるをえない。やがて最終的に眼を閉じた僕の肉体が腐敗の時間を体験するあいだ、友人の眼がそれを見まもり、その正当な意味を了解してくれることはないのである。

——かれが療養所から帰ってきたとき、もういちどあすこへ戻るようにすすめるべきでした。

——いいえ、この子があれ以上あすこに入っていることはできませんでしたよ、と友人の祖母は答えた。療養所で立派なことをしたこの子は、他の精神病患者から、すっかり尊敬されました。それでもうあすこにとどまっていることはできなくなったのです。そのことを忘れて、あなたが自分を咎めてはなりません。いったんこうなってしまえば、本当にはっきりしていますが、この子は、あすこから出て、自由な生活を送ることになって本当によかったのですよ。もし、あすこで自殺するとしたら、顔を朱く塗って裸になって首をくくることなどはできなかったでしょう。あの子を尊敬している他の精神病患者に妨害されましたよ。

——あなたがしっかりしていられるので力づけられます。

——誰もが死ぬんですよ。そして百年もたてば、たいいてい人間が、どんなにして死んだかを詮索されはしません。自分のいっとう気にいったやり方で死ぬのが最上ですよ。

ベットの裾に坐りこんだ友人の母親は、やすみなく死体の足をさすっていた。彼女はおびやかされた亀のように、肩のあいだ深く頸をめりこませ、われわれの会話に反応しない。酷たらしいほど死んだ息子に似ている、平べったく植物的な顔の小さな造作がすべて、融けてゆく^{あめ}鉛みたいにぐんにやりと弛緩している。僕はこのようにも即物的に徹底した絶望を表現している顔をかつて見たことがないと感じる。

——サルダヒコのような、と死んだ友人の祖母が脈絡のないことをいった。

サルダヒコ、僕はなにやら土俗的な滑稽の響きがするその言葉から、不確かながらも意味を喚起されそうになるが、僕の脳髓の脂肪質は疲労からすでに煮コゴリになっており、わずかに震えはするものの、その震えが拡大されて意味の糸をほぐしてゆくにはいたらない。僕は無益に頭をふりたてると、サルダヒコという言葉は意味の封印を解かれないまま、記憶の層の深みに^{おも}鍾りのように沈んで行った。

そしていま、わずかな水のたまっている穴ぼこの底に犬を抱いて坐っている僕の頭に、懐かしい記憶の鉱脈のあきらかな露頭として、サルダヒコという言葉が浮かびあがってきた。あの日以来凍結しつづけていた、この言葉の周辺に関する脳髓の脂肪質の煮コゴリが融けたのである。サルダヒコ、サルダヒコノミコトは、天降る神々を天の八衢^{ヤチベ}でむかえた。その^{さんしこゆう}闖入者群の代表としてサルダヒコと外交折衝^{せつしやう}したアメノウズメは、新世界の原住民たる魚どもをあつめて支配権を確立しようと試み、沈黙して抵抗した海鼠^{たまこ}の口を、此ノロヤ答ヘヌロとナイフで切りさいた。頭を朱色に塗った、わが心優しい二十世紀のサルダヒコは、むしろその口を切りさかれる海鼠の同類ともいふべき人間だった。そのように考えると多量の涙が湧くだして頬から唇につたわり、犬の背中に落ちた。

死の一年前、友人はコロンビア大学での留学生生活を中断して帰国すると、軽症の精

时，友人的眼睛不能为我去注视它、去理解其真正的涵义。

“他从疗养院回来的时候，应该劝他再回去。”

“不，这孩子不能再在那里呆得更久了。”友人的祖母答道，“这孩子疗养院做得很好，其他精神病患者非常尊敬他。所以，已经不能再留在那里了。忘了那些吧，你不要责备自己。事态一旦如此，就非常清楚了。这孩子从那儿出来，过上自由的生活，真的很好啊！如果在那儿自杀的话，就不能把脸涂红、光着身子的上吊吧？是会被尊敬他的那些精神病人阻拦的。”

“您这么坚强，也给了我力量。”

“谁都会死的。而且一百年以后，大多数人是不会探讨他们是怎样死的。能用自己最满意的死法去死，是最好的了。”

友人的母亲坐在床脚，一直不停地按摩着死者的脚。她像只受到威胁的乌龟，脖子深缩进双肩之间，对我们的对话毫无反应。与惨死的儿子酷似的扁平的植物般的脸上，所有细小的组成部分如同融化的糖果绵软、松弛。我感觉，我从未见过如此真实地表现出彻底绝望的脸。

“像猿田彦^①一样。”友人的祖母说了一句不着边际的话。

猿田彦，虽然我好像被这个发出土俗、滑稽回响的词语唤起一些不确切的意识，但我脑髓的脂肪质由于疲劳已经变成了肉冻，虽有细微的震颤，但这震动还没有扩大至足以解开其含义的绳索。我毫无意义地用力摇了摇头，猿田彦这个词依然带着尚未解开的意义的封印，如铅坠般向记忆的深处沉去。

现在，我抱着狗坐在有少量积水的坑底，猿田彦这个词作为大脑中令人怀念的记忆矿脉的明显头绪，开始浮现出来了。这是因为，从那一天起一直冻结着的、这个词周边的脑髓脂肪质的肉冻融化了。猿田彦，猿田彦殿下在天界岔口迎接下凡的天神们。作为闯入者代表与猿田彦进行交涉的天宇受卖神^②，试图确立统治权，把新世界原住民鱼类聚集到一起，以‘此嘴为不能言语之嘴’为由，将沉默抵抗的海参的嘴用刀子豁开。脑袋涂成朱红、心地善良的二十世纪的猿田彦，更像是那个嘴被豁开的海参的同类。这样一想，我不由得泪流如注，从脸颊流过嘴角，滴落在狗的背上。

在去世的一年前，友人中断了哥伦比亚大学的留学生活。回到国内，就进了轻度精神失常的疗养院。关于疗养院的所在及友人那里生活状况，除了他的自述外，我一无所知。他的妻子、母亲、祖母也没有亲自去过那个位于湘南地区的疗养院。友人禁止与他有关的所有人去那里探访。如今想来，这样的疗养院

①猿田彦是日本神祇之一，记载于《古事记》。鼻长八尺、背长七尺，红脸高鼻，也是传说中妖怪“天狗”的原形。日本神话中，他曾经担任迎接天照大神的孙子下降接管葦原中国，所以后世也把他视为道之神或猿人之神，也因此因此在祭典中常常担任神祇先导的角色。因为迎接有功，他被封为道祖神之一。迎接天照大神的孙子下凡之后，猿田彦回到故乡，伊势国的五十铃川上游。在阿耶珂一带的海域捕鱼的时候，被比良夫贝夹住脱身不得，最后溺死。总之，猿田彦神就是负责迎接引路的，也有“接引”的意思。

②传说天照大神藏身于岩屋中，而导致天地黑暗。天宇受卖袒胸露体而舞，天界八百万神祇为之疯狂，引天照大神现身，天地重新恢复光明。这也被认为是日本巫女和巫女舞蹈的始祖。

神異常者のための療養所に入った。その療養所の所在と、そこにおける友人の生活について僕は、友人自身による報告より他のことを知らない。かれの妻や母、祖母もまた、湘南地方にあるというその療養所を実際に訪ねたことはなかったのである。友人がかれをめぐるすべての者に、そこを訪ねることを禁じた。いまとなってみれば、果たしてそのような療養所が実在したかどうか^{さだ}かではない。

それでも、とにかく友人の言葉を信ずれば、療養所はスマイル・トレーニング・センター、または微笑道場と呼ばれていて、そこに収容された人々は、毎食時に多量の精神安定剤のみ、昼も夜も、みんな穏やかに微笑して心安らかなる時をすごすのだ。それは、湘南にごくありふれた海浜寮風の平屋建で、建物の半分がひとつのサンルームをなしている。昼間は、たいていの患者たちが、広い芝生につくりつけられた数多くのブランコに腰をかけて話し合う。収容されている患者たちは、厳密に言えば、患者でさえない、いわば長逗留の旅行者である。精神安定剤を服用した旅行者たちは、この世界のもっともおとなしい家畜のような生きものとなって、おたがいになごやかな微笑をかわしあいながら、サンルームや芝生で時をすごすのである。外出は自由であるし、誰ひとり自分が監禁されていると感じるものはいないから、逃亡するものもない。

スマイル・トレーニング・センターに入って一週間目に、友人は新しい本や着がえをとりに戻ってくると、かれよりもまえに入院している穏やかに微笑した患者たちの誰にくらべても素早^{すばや}く愉快に、自分がこの風変りな場所に適応してしまったようだった。ところがなお三週間たって、もういちど東京に戻ってきた友人は、あいかわらず微笑してはいるものの、かすかに悲しげなのだ。そして友人は、かれの妻と僕とに、こういう打明け話をした。かれら患者たちに精神安定剤と食事を配る看護人が粗暴な男で、精神安定剤を服用して腹をたてることもできなくなっている無抵抗の患者たちに、たびたび、ひどいことをする。いささかの動機もなく、すれちがいざまに腹部を強打する、というふうなひどいことを。僕はセンターの責任者に抗議することをすすめたが、友人は、そんなことをしたら、院長は、おれたちが退屈^{たいくつ}のあまりに嘘をついているか、単なる強迫神経症にかかっているか、あるいはその双方かだと思うだろう、といった。おれたちほど退屈しているものは、すくなくとも湘南海岸にまたいないんだし、おれたちはみな、おおかれ少なかれ、気狂いなんだから。その上、おれも精神安定剤のおかげで、自分が本当に腹を立てているのか、そうでないのか、はっきりしない始末なんだよ。

しかし、その日からほんの二、三日後に、友人は、朝食時に服用すべく配給された精神安定剤をのまず、昼の分も、夜の分も同様に、水洗便器へ流してしまった。そして翌朝、自分が確実に腹を立てていることを発見すると、粗暴な看護人を待ち伏せして、かれ自身も相当の被害はこうむったものの、結局は看護人を半殺しにした。この事件によって友人はおとなしく微笑した僚友たちから、深く尊敬されたが、院長との話合いのあと自分はそこを出なければならなかった。日ごろのとおり愚かしげなほど善良に微笑してかれを見送る精神病患者たちに挨拶の手をふって、スマイル・トレーニング・センターを去る時、かれは生まれて初めてと感じるほどにも深甚^{しんじん}な悲しみをいだいた。